

天眼

コロナから天然痘へ

永田 和宏

3年ぶりに国際会議に出席して帰国したばかりである。細胞内でタンパク質がどのように作られ、そして分解されていくのか。いわば『タンパク質の一生』(拙著、岩波新書)に関するシンポジウムであり、私の研究分野である。2年に1度開かれていたのだが、コロナ禍で4年ぶりの開催となった。

アイルランドのダブリン郊外の小さな村。夜は10時半を過ぎてはまだ明るい。従来、年に2度か3度は世界のどこかで会っていた友人たちと旧交をあたため、その仕事の進展ぶりに目を見張り、そしてビール片手に楽しく話す。最後は恒例のダンスパーティーまでついて、対面のミーティングに勝るものはないと改めて実感した。

そのあとドイツのハイデルベルクへ回り、同じ会議にも出席していたハイデルベルク大学のB教授夫妻に夕食に招かれた。私の研究室にいた学生が留学中でもあり、彼を交えてレストランの戸外の席で楽しい時間を過ごした。あまり暗くならないうちにと別れたのが10時過ぎ。

そこまでは良かったのだが、帰国と同時に飛び込んできたメールにびっくり。B教授からで、コロナ陽性になったと言った。私はフランクフルトの空港でPCR検査を受けて陰性だったのだが、これはまずいとすぐに検査に走ったら、あらら、抗原検査だけで見事、陽性のラインが出てしまった。

日本に帰ると、まさにコロナの第7波が始まったところである。オミクロン変異のBA.5株に変ったことで、これまでにない感染爆発をきたし、終息の見通しは立っていないようである。改めて、ウイルスとの長期戦、共生を考へざるを得ない。

人類の歴史は感染症との闘いの歴史であったとはよく言われる言葉だが、人類が集団生活を始めた時から、感染症はもつとも恐るべき敵であり続けた。しかも、現在までに人類が撲滅することができた感染症はたった一例しかない。それが天然痘である。



(J-T生命誌研究館長、歌人)